

「大きな試練」(創世記二二章一〜一九節)

1 試練

今日の聖書箇所は次の言葉から始まっています。

これらのことの後で、神はアブラハムを試された(一節)。

今日の箇所を読んですぐ分かることは、アブラハムがいま大変な危機に直面しているということです。

どういう危機なのか、アブラハムに託された使命、その歩みを、振り返ってみなければなりません。

アブラハムの使命というのは、少し大きな見方をすれば、神の民イスラエルの基礎をすえるというところにあります。イスラエルはまさに彼に始まる、あるいは彼に始まった。そしてこのイスラエルこそが世界の国民(くにたみ)の祝福の基となるというのです。

そうであるためには、当然のことながら、アブラハムを引きつぎ、神の民の形成になつていく後継者、子孫がなければなりません。私どもはいままでこそ、アブラハムの子がイサクで、イサクの子がヤコブで、このヤコブに二人の子供があり、それがイスラエル一二部族になった、イエス・キリストもそこから出た、すらすら言えるほどよく知っています。

しかしじつはアブラハムとイサクの間がなかなかつながらなかったのです。アブラハムが神の祝福の担い手となるべく、神の召し、神の言葉に従って故郷を後にしたのは七五歳のときです。妻サラは不妊で子供ができなかったと聖書にはじめから書いてあります。

それでも神は、二人の間に、子供を与える、その子供が神の約束の次の担い手になるとくり返し語ります。しかし子供はできません。そこでその間にアブラハムは、彼の家で生まれた奴隷を跡取りにしようとしたり、ついには妻サラの召し使い、名前はハガルと言います、この女性によって子供を得ようとします。果たしてアブラハムとハガルの間に男の子が生まれ、イシュマエルと名付けられます。アブラハム八六歳のときでした。ところがその一四年後に、妻サラに子供ができるのです。それがイサク、アブラハムは百歳、妻サラは九〇歳でした。

イサクが生まれたことはどんなに喜ばしいことであつたでしょうか。ところが、そうなると、召し使いの子イシュマエルは邪魔になります。アブラハム自身はイシュマエルとイサク、二人を後継者に思っていたかもしれないませんが、それは神の御心になわなかつたのです。ついにハガルとイシュマエルは追い出されてしまいます。それは、私どもが前の章、二一章の前半で見た通りです。

残ったのは、約束の子イサクただ一人です。一人でも、担い手はいるのです。彼こそいまやアブラハムの唯一の望み、慰めです。こうして、いろいろあつたけれど、ようやく老年に入つて、いまアブラハムはいささかの平和と幸福とを手にし始めたと言

ってよいと思います。

「これらのことの後で」という一節の言葉には、そのようにしていま獲得し始めたわずかばかりの平穏な生活のことも、含まれているに違いありません。そしてそのようなわずかな幸福のただ中に、神は突如として介入し、イサクを取り上げようとしたのです。

それは神の試みであった、神がこの試練をアブラハムに与えたのだと、今日の箇所は語っています。

振り返ってみれば、アブラハムの人生の歩みはつねに試みられた人生であったと言えるかも知れません。七五歳で召命を受けたときも、飢饉でエジプトに逃れざるをえなかったときも、子供の誕生が約束されていながら、ほとんど希望をなくしかけるまで生まれなかったときも、そうです。そしてそうした神の、いわばテストにいつも合格していたとばかりはいえないのです。「これらのことの後で、神はアブラハムを試された」とは、それまでのその時々神の試練がいまやもつとも過酷な仕方であつたに方向けられたということなのです。

しかしむろん、誤解してならないのは、それは神がアブラハムを見捨てたからではないということなのです(ヤコブ一・一三)。言うまでもないことです。むしろ愛しておられる。それは少しも変わりません。イスラエルの父祖、信仰の父として、諸国民の祝福の基となることを期待しておられるのです。彼の信仰は試すにも値しないというわけではありません。神はアブラハムを愛し、期待しておられゆえに、また試み、訓練し、信仰をきよめてくださるのです。その事情は私どもにおいても変わりません(ヘブライ一・二・七)。

2 服従

試みの出来事の始まりはこうです。

神が「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が「はい」と答えると神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れてモリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(一・二節)。

一切のことは神が「アブラハムよ」と呼びかけ、アブラハムが「はい、ここにおります」(口語、聖書協会共同訳)と答えたところから始まります。彼は神の言葉の前に立ち、それに聴き従う人間です。み言葉に最後まで忠実であるかどうか、最後まで従うかどうか、それが試されるのです。

神の要求は三つの命令の言葉で示されています(邦訳は少しはつきりしない)。愛する独り子イサクを連れていくこと、モリヤの地に行くこと、そしてイサクをささげることです。

神の下した命令は、それにしても何と厳しいものだったでしょうか。アブラハムにとつて、イサクは、老年になって与えられた、慰めと希望のすべてがかかっている「独り子」です。それ以前のこととして、神が要求している親が子を殺すことは、そもそ

も人倫にもとる行為です。

イサクが犠牲としてさきげられ、イサクがいなくなることは、じつは神ご自身にとっても厳しいことでした。それは祝福の基として神の民イスラエルを形づくる神ご自身の救いの計画も頓挫させるものだったからです。

神の命令に接してアブラハムの心の中に激しい内面的な葛藤が起こったことは想像に難くありません。しかしそうしたことを暗示する言葉は今日の箇所に見えないように見えます。しかしあえて上げれば、三節です。

次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、捧げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った(三節)。

この「次の朝早く」です(「朝早く起きて」口語訳、聖書協会共同訳)。私には、この小さな言葉が、前の晩の激しい心の中の闘いを暗示しているように、思われるのです(一五・一二)。

様々の思いが去来し、互いに激しくせめぎ合ったでしょう。闇の力、サタンの声は人間の倫理に味方したはずです。親が子を犠牲にして神にささげる？ イサクを失って自分たちの人生は、われら一族は、どうなるのだろうか？ それは人間の正直な声です。しかしそうしたもろもろの思いの中で、やがてアブラハムに、一つの自分の進むべき道が見えてきたはずです。神の命令に従う、一点の曖昧さもなく彼にはそう思われたのです。この決意を実行に移すため、彼には夜が明けるのも遅いと思われたに違いありません。アブラハムは闇の力に勝利します。アブラハムは「朝早く起きて」従って行った。服従の道が最後まで歩まれることはすでに疑いありません。

三日の道のり、同行してきた二人の若者をふもとにおいてアブラハムとイサクは「神が命じられた場所」(九節)に登っていきます。途切れがちな会話の中から、今日は一つだけ取り上げます。

イサクは言った。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」。アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきつと神が備えてくださる」。二人は一緒に歩いて行った(七〜八節)。

「焼き尽くす献げ物」、口語訳では「燔祭」と訳されていました。後のユダヤ教では、手順にしたがい祭司が動物が焼き尽くし、民の罪のゆるしを求めたり、感謝を捧げたりしたのです。

イサクは、いけにえの小羊がいなことに気づいています。イサクの質問にアブラハムは「きつと神が備えてくださる」と答えます。アブラハムは、本当のことが言えず、言い逃れをしたという理解もあります。おそらくそうではなくて、アブラハムは私ども人間がそれとして用意するものではなくて、神が備えてくださるもの、それがいけにえに用いられると言っているのです。そのいけにえが、たとえ我が子であろうと、です。

3 逃れの道

物語はクライマックスを迎えます。

アブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる物であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」。アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物として「ささげた（一〇〜一三節）。

アブラハムがイサクに手をかけようとした瞬間、神は御使いによって、それを制止します。イサクに代わる一頭の雄羊が用いられたことによって神の命令は結局最後まで遂行されなかったということなのでしょう。そうではありません。遂行されたのです。ここにある御使いの言葉に明らかです（一二節）。アブラハムは神の言葉に、神の命令に従い通し、なおかつイサクを返していただいた。私どもは、有名な使徒パウロの言葉を思い起します。

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は信実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてください（二コリント一〇・一三）。

試練の中にあるアブラハム、彼に「逃れる道」が備えられたのです。それは徹底して信仰と服従の道を歩むその先で神に与えられたものであることは、言うまでもありません。

他方、アブラハムの息子、愛する独り子イサクもたしかにささげられたのです。このイサクにおいて、イサクを通して私どもに見えてくるのは、神の独り子イエスのことではないでしょうか。

イサクははるかにイエス・キリストを指し示しています。モリヤの山はエルサレムを暗示しています（歴代下三・一）し、薪を背負ってモリヤの山に向かうイサクは十字架を背負ってゴルゴタに登っていくイエスを示しています。黙って木に縛られるイサク。「わたしと息子」は「また戻ってくる」（五節）というアブラハムの言葉は復活を暗示すると理解されています（ヘブライ一・一九）。

イサクがささげられて、神の民イスラエルが、御心になつたものとしてつくられていきます。それと同じようにイエスがささげられて、新たな神の民、「神のイスラエル」（ガラテヤ六・一六）がつくられます。教会はこの新しい神の民です。私どももその群れとして恵みによって召されています。もちろん教会は自己目的に存在するものではありません。宣教によって大きな神の民の形成に奉仕するのです（黙示録二一・三）。イエスは、神の祝福の基、新しい世界の基礎です。イサク奉獻のことを聞きながら、私どもは改めてこの方のことを思い起こさざるをえません。イエス・キリ

ストを福音として宣べ伝えていきましよう。

(二〇二〇・一〇・一八)